



平成30年9月1日(土)

藤 棚

第357号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

秋風のころよさを求めて

校長 小川義男

猛暑の夏であった。中等部の修学旅行は北海道だったが、それでも、暑さを感じるがあった。関東では、蝉もあまり鳴かなかった。命短い身であろうに、暑すぎて、あまり鳴けなかったののだろうか。キリギリス、鈴虫の声も聴きたいが、思うに任せぬ。

父上、母上を失った生徒もいる。慰めの言葉もない。私的なことで恐縮だが、私は五歳の時に母を失った。その哀れさに比肩して、今の悲しみに耐えて欲しい。ご愁傷様と、私の心の奥に、深く言い聞かせる。悲しみにめげることなく、人生を生き抜いて行こう。

海に山に危険が一杯だったが、生徒諸君は、元気に学校に立ち戻ってくれた。この先も危険は多い。特に女子は、各種犯罪から身を守る事に留意して欲しい。

楽しい学園祭も近い。火傷に備え、バケツ満タンの水をそばに置け。昨年、被害はなかったが、茹で釜が倒れ、火傷寸前の危険を生じた例もある。

学園祭のあとには、読書の秋が訪れる。啄木に、「秋風のころよさに」という詩がある。探してコピーし、好きな詩を貼り付けたノートを作ってはどうか。

詩は音読が一番だ。君らは、生涯で、今が一番、声の美しい頃ではないか。秋風、落ち葉の中で、音吐朗々、声を出して朗唱してはどうか。

「燈火親しむの候」と言う。蠟燭やランプの灯で、読書を楽しんだ時代もあった。

文化、学問を担うもの、それは言葉である

「友を選ばば 書を読みて 六分の俠気 四分の熱」、与謝野鉄幹の一節である。書を読まねば、人らしい人たり得ないし、俠気のない男は男ではない。本質は女にも通じるだろう。

読書は、人に深みを与える。

読書する中学生、高校生を育てるため、山崎修先生が、PTA と交渉し、生徒ホールに新聞を用意して下さった。

「読売」、「朝日」、「毎日」、「産経」、「Japan Times」の五紙である。いつでも自由に読める。「Japan Times」などは、先生方も、生徒ホールでお読みになるのではないかな。

岩波新書は読みやすい。すでに大量に開架式で、生徒ホールに用意されている。

近く、日本文学全集を同じく開架式で、生徒ホールに用意するつもりである。騒音の巷ほど、集中力は増す。良い詩を書き抜いたノートを作るのも良いのではないかな。

校長といえども、俗物に過ぎぬ。活字の向こうには天才が居る。天才に、友を求めて欲しい。

重ねて言うが、雑踏の巷こそ、集中できるもの。読書の秋を学校で。

猛暑のあとには、鈴虫も鳴かないのかなあ。ともあれ秋は近い。季節の深まりを文学と共に味わおう。

私はなまくら もっと勉強するんだった

同期に和田君という秀才が居た。北大に進み、在学中に司法試験、国家公務員上級試験に合格した。校長の息子だったが、ぎらつかない、穏やかな秀才だった。

彼と私に、先天的能力差があったとは思わない。但し、生活環境は違った。私は、父の仕事の関係で、中高六年間に八回引っ越している。途中、父の小さな会社の倒産もあった。あのような環境では、勉強もできないのかも知れぬ。

だが、当時北海道には、空襲を逃れて、東京や大阪から疎開してきた秀才達も居た。私の先輩に当たる学年だったが、居住条件は悪く、貧しかった。大学の受験料は500円だったが、その金がないので、除雪人夫として働いていた。私も働いたが、労働は極めてきつく、昼弁当を食べると、泥のように眠りこけた。殺されてもいいから、このまま寝ていたいと思った。だが、疎開先輩達は、食後の疲れもものともせず、英語の単語を暗記していたりした。やっぱり、「俺とは違うな」と思った。

私はなまくら、今も痛恨の思いが心の底から突き上げてくる。私は、へこたれないが、これからの私に何ができるだろう。

それだけに、無限の可能性を持つ君たちには、悔いなき努力を切望するのである。

転校生に気配りを

本校は、原則として転校生は受け入れません。但し、帰国子女、本校中等部の卒業生で、他校へ進学した生徒の場合は、受け入れることがあります。

新学期には転入生のある場合があります。

転入生は、心細い思いで新学期を迎えます。転入生がある場合は「親切競争」をやって下さい。

職員室に新しい教師が入った場合、その方々は心細い思いをして着任します。でも、なかなか親切にできないものです。新人には、徹底的に親切にする大胆さを持って下さい。我が身を新人に置き換えてみれば、できることでしょう。親切にも勇気が必要なのです。優しく、温かく、そのはざままで、君たち自身も育って行くのです。